

農業改良普及部編

『生活改良普及員活動事例集』第一輯

生活改良普及員の足跡と課題

内山政照

光と影 廣い人事院講堂に聴衆があふれている。大臣や多くの代議士も参會した。演壇上には簡素なワンピース姿のお嬢さんが、心持ち頬を染めて、いましも圖表の説明に懸命である。その鞭の先きを追つてニュース・カメラのライトが一條二條、はなやかに彼女の全身を浮び上らせる。

そこに云い現わされた言葉やデーター自身はまことに苦難に満ちた陰惨なほどの影を含んでいるのに、この會場に満ち満ちているふんい氣の中で聴いていると、それが不思議にお伽話を聴くような快さで響いてくる。私はその時たまたま鞭の先が指示した、農家の汚い室所の寫眞に目をやつて、これは實話だとハッとしたとき、話は終つて盛んな拍手。

去る四月末、東京で賑やかに行われた全國生活改良普及員の活動報告大會での私の経験であつた。

しかし、このとき直ぐに私に想い浮んだのは、先年私が全國農業改良課長會議に出たときに燒きつけられた印象であつた。それ

〈書評〉 生活改良普及員活動事例集

はその席上で、ある——たしか東北地方の——課長が本省關係官に向つて次のような意味の詰問に似た質問を發したときのことである。「生活改善々々といつてカマドをどうしろ、モンペをどう作れなどと言つてくるが、地方の農民はそんなものは相手にしていいない。一たい東京の關係者は生活改善事業をどう考えているのか」と。また實さうに私たちが村を尋ねたときにも（或いはこの活動事例集が一貫して言つていふように）生活改良普及員たちの晝夜をわかつたぬ蹠身的努力にもかかわらず、村びとたちの日々の生活の間に現實に滲みこんで行くことがなかなか難しいことが感ぜられるのである。

生活改善事業は他の普及事業の部門に比べてみると、いろいろな事情のためにとくにこうした厳しい批判と現實からの激しい抵抗を受け易いと同時に——或いはそれ故に同じ事情が——またある種の主として指導者と稱せられている人々によつては、最も「好もしきテーマ」として支持されているように見える。東京と地方の現地との間、指導者と農民との間にはこの事業に關して深い斷層が横わつているとさへ言えるかもしれないのである。ここでは「光と影」とがややしく交錯している。

しかしこの斷層は既に事業開始以來の四年にわたる第一線の改良普及員たちの苦難に満ちた實さうい活動そのものの中から、次第に埋められてきていふ、或いはその可能性が芽生えつつある。私が以下に紹介しようとする『活動事例集』（昭和二六年發行）がその何よりの證據である。と云ふのは、それが結局のところ彼

私たちの不安と疑念を明らかにしたと言いつてしまつてもよいものであるが、まさにそのなかにのみ、この斷層を接合すべきセメントが用意されているからである。

二

事業の進展のうちに この事業は處女地に鉄をうち込む仕事であつただけに、そのための多くの困難があつた。まずその仕事そのものから説明してかからねばならなかつた。

「普及員として採用され現地に入りまして、最初に質問されること、それは生活改良普及員とは一體何をするのかと言うことであり、それを地方事務所の職員から千守のおばあさんにいたるまで、説明せねばならない状態であつた。」（愛知縣、井戸田氏、同書二八三頁）。お嬢さんとして受けて來た教育、女性であるというとくに豊村では意味の大きいハンディキャップなどは、迷信、無理解に渦巻く農民たちの間では、ほとんど彼女らを困惑に陥れるだけにした。全くそれは「暗夜の手ざぐり」（熊本縣、元島氏、一二頁）のような日々であつた。

この迷える羊を導いたのがまず「實態を知れ」という天の聲であつたのは、もつともである。ある普及員は書いている。課長から、「私が若し貴女であつたならば、先ず農家を訪問して身近かなことの調査から始めます、科學性のある調査に基づいてそのなかから問題を見付けます」と。このお話は私共にとつて明る光明となりました」（熊本、元島氏、一二―三頁）。このばあい學校

で習つた分析用具のかけらはさつぱり役に立たない。ともあれ上から申達して來ている改良事項がある。この窓を通していわゆる「實態」なるものにぶつかつて行かざるを得なかつた。臺所は明るい、カマドは改良されているか、等々、その目は臺所、寢室から便所の隅々にまで及んで行つた。（二―五頁に、茨城縣百武氏の作つた生活改良普及活動の一覽表が掲げられているが、これにはほとんど全てが網羅されている。）

こうして與えられた改良事項の網の目に、多くの塵あつた（改良すべき事項）が浮び出てくる。良きもの悪きもの、善玉悪玉原則、「良いと思うか、悪いと思うか」（六八頁）という問い方からは、従つて臺所調査、カマド調査、燃料調査（二一〇、一八二頁など）などについて斷片的に「否、不合理」という答が多く出て來ることになつた。「これによつて農家の臺所が如何に不合理なものであつたかを一そうはつきり感じました」（徳島、平田氏、四〇頁）。かくてすべては「困つたもんだ、何とか改善せねば」という結論に落着く。

これによつてしかし手掛けるべき仕事は明らかになつた。そしてここにすくいとられて來た個々の點に向つて各個擊破を試みることであつた。その間には例えば多くの迷信と、改良のための資金のよりに、多くの困難があつたけれども理解ある村の指導者たち、農事研究會、4日クラブ、協同組合、又男子普及員たちの協力によつて仕事が進められた。とくに村の當局者指導者にとつては、いわゆる生活改善は——既に經濟更生運動時分から——好ま

しきテーマであつたから、ここでは既に小麥粉は醗酵していた。

「そういうことは、前からやり度いと思つていた。」(ある村長の言葉)。従つて、彼女はただパン種であればよかつた筈、いもある。(二四〇―二四一頁の例の如し)。

こうして一年、二年経つた。そして役所から要求されて「效果の測定」をやつてみる。昨年と今年ではどれだけ改良寮所が増えたか(福島、田谷氏、一八四―一八五頁)等々というわけだ。そして数字的には大きな効果がはつきりしたといわれなければならない。

そしてとくに注意し度いことは、この各個擊破によつて、その一角のみならず他の場面にまで効果が波及していつたことである。

水道作り→寮所改善→その資金獲得のための小家庭導入→栄養改善→婦人活動の積極化、衣食の問題へ(大分、赤蜂氏、二三一―二二頁)。栄養改善問題→作付計畫へ(島根、湯淺氏、一〇八頁、及び鳥取、盛田氏、一〇四頁など)。「かまどを手始めとして全般の改善が始まる」(一一頁)。

三

不安と疑念 しかしこのような事業の進展に伴つて、その活動のなから新しい問題がいよいよ明らかに提起されてくる。

「此のような組織、グループを對象として講話、幻燈、ポスター、紙芝居、寶箱等により総合的な生活改善への啓蒙運動、栄養知識の普及、その他寮所改善、保健、衣服の問題等つとめて色々

な問題を提供して、意欲の向上をはかつてきましたが、二、三のグループが寮所改善をとりあげ、改善貯金をしている程度であとは殆ど料理のみに集中しております。ここで私がひそかに恐れている事は農民が一つの慰安、娛樂として料理の講習を選び、手段故にと思つて私のなしたことが、ただそれだけに終つてしまふのではないかという疑問です。

今後の指導法における課題ですが、此の料理の講習というものも始から私がそこに問題を見つけ、仕事の方針をきめて食生活改善からとり上げて行つたと言ふのではなく、むしろ私はそれを通じて農民が何を考え何を欲し、如何なる生活を續けているかという實態を掴みたかつたのです。云いかえれば改善すべき問題を正確に把握し、改善の方針を立てるための手段として講習會をして來たのであります。(しかし現在ではそれが方針となり、第一の手段となつたかのように變化しつつあります)。

此のように農民の本當の聲を聞き、改善への資料とする爲に私は講習會と並んでもう一つ調査を出来るだけやつてまいりました。料理講習の後にも必ず部落ごとに感想調査の用紙を配布して味の良否、作り方の解不解、時間や材料の可否、家族の評判、今後の希望、その他十項目位にわけて該當事項に○印をつけてもらふようにしました。此の結果殆どよかつた、わかつたと答えており此の種の講習會を時々やりたいと望んでいることがよくわかるのです。それにも拘らず今後の希望、料理以外に何を望みますか、かの問に對しては、無記入が七五%以上にも上るといふことは一

體何を物語るものでしょうか。「わからない」これはあまりにも悲しい言葉です。それでは私の方も「わからない」という事になりいつまでも農家の實態はつかめそうにもありません。此の農家の實態をつかむということこそ、普及事業の最初であり、最後の問題であり、如何に此の事業が發展しても常につきまとう大きな課題ではないでしょうか。

料理の講習をすれば本當に喜んでくれ、家へ歸つてからもかなり實行してくれています。衣服の簡単な作り方を實演すれば成程いい事だ、こういう事も時々やるといいと口を揃えて申します。臺所の不便さを話せば、本當にそうだと共鳴し、氣のある人は少しでも改良して行こうとしています。でもただそれだけでいいのでしょうか。もつと根本的に掘り下げて考えてみなければならぬとたえず心をはげましています〔静岡、安間氏、一七四―五頁〕。

「二十五年度は生みの苦しみでありましたのに比べて、現在は育ての苦しみを味わつて居ります。何處迄成長させ得るか私も今年度こそ洗つても落ちないしみとおつた普及活動でありたいと思ひその爲に最善を盡したい覺悟であります。」〔鹿兒島、中野氏、二五三頁〕

手段として普及した料理が目的そのものにされてしまふこと、「ハイハイ」と喜んで受講し、料理を實行してくれるが、「何を望むか」という問に對して「わからない」と答える七五パーセントに上る人々の群。人間の基抵まで廻轉させることができない、内なる力を喚びさますことができず逆にかえつて一そう指導者た

る改良普及員に従屬追隨させてしまふかもしれないのだ。「ただそれだけでいいのでしょうか」という深刻な疑念が頭を擡げてくるのをどうすることもできぬ。「私の二年の苦心は、結局洗えばはげてしまふような染物を染め上げたことではないか」という不安に悩まされることになる。

四

問題の發見 この不安と疑念そのものの中に問題が發見される緒があつた。その第一は、普及活動の及ぶ廣さ（範圍）に關する反省が生じたことである。

事業を任意にグループ・ウォークとして進めていくばあいには次のような問題が出てくる。(1)青年團などのような網羅組織との調整、(2)全體に廣く活動を浸透させることは難しい、どうしてもある條件の整つたグループに限定される。(3)それにしても經濟・資金の面から限界がある。(4)無關心な農家との差がいよいよはつきりしてしまふのではないか。

比喩的に云えば「少年期」のように、山の手の模範家庭の子供を集めて、模範學校を作つていい氣になつていたのではあるまいか、「山彦學校」の子供たちを見捨てていたのではないか、という反省なのである。（静岡、安間氏、一七六―八頁）

そしてあるひとはこの難關を突破するために家庭訪問という方法を選んだ。

―最初は會合に出るよりも家庭訪問の方がよいと思つていまし

たが今は會合に出るよりも家庭訪問の技術の方がむずかしいと考えて居ます。

會合は何々を知ろうと云う受入態制になっていますからその要求によつてやれば良いのですが、訪問の場合はこちらから與えようとするもの以外に、何を要求しているかと云う事を探り出さねばならないわけであり、又いたずらに飛び込んで行つた所で仕方がないわけであつて、豫めその農家の色々な状態を知つて置く事が大切だと思います。しかしそれはやはり農業改良普及員と協力して行かれば實施出來ない問題であり、又私の弱點が未だに農家の經營狀態及純益金の如何程かをつかみ得ない所にあるわけであります。

戸別訪問する家は會合に出て來られない家に重點を置いて行く事になっています、ですから勿論改善等に意欲がない所であり又知ろうともしない方達が多いわけです。」(愛知・井戸田氏、二八五頁)

ともあれ、このような反省は何故「善いこと」がこのような農家では實行されないか、善いこと、合理的なこととして魅力的に評價されないかという問題提起を通して、一方では「生活」の問題を、農家をつんでいる社會の構圖(政治的・經濟的・社會的)のなかに押し進めて行くきっかけを與えると同時に、他方では個々の「善きこと」の斷片は、具體的な農家の全生活構造(經營條件、資金狀態、家族の社會的構成とパターン等の複合體)のなかでのみ始めてその農家にとつての「善きこと」に轉化しろるとい

う認識を、不可避免的に生ぜしめるであらう。ここに當初の「善玉惡玉原理」が揚棄されるきつかけがある。

そしてこのことはまた逆に、普及活動の内容としてきた生活技術そのもののへの深刻な反省を生むことになり、自分たちの手許にいまとどけられているレディメイドの生活技術の基本的轉回を要求するところにまで到るであらう。

第二のチャンスは普及活動の及んだ深さに關する反省から與えられている。すなわち初めは金も大して要らず、それによつて社會技術の網(an integrated system——内山『普及文獻・資料集』二六頁)もそれ程搖さずに済むような、それ故に既に相當醸成していた生活技術・物が入つていつた。手を洗ひましよう、齒をみがましよう。顔を洗ひましようという類の如し。従つて普及員はこのばあいさんに觸媒であればよかつたし、家事技術も全國、全村の農家共通の一本のものでも、そう大した錯誤は來さなかつたにちがいない。この限り、生活改良「普及員」でなくとも、「カマド構築者佐官屋」かあるいは「洋裁の先生」であれば済んだといつてよい。しかし、その及んだ深さは、生活の極く表層に止まり、それ故に「結局洗えばはけてしまふような染物を染め上げ」るに過ぎないかもしれないなかつたのである。

しかし、仕事が次の段階に進んで深く掘り下げられてくると、もつと生活の基幹の部分に關わつてくることになる。例えば、お客さん用のカステラでなく、日々の食事に、臺所に窓を一つ明けることでなくて、家屋全體の構造その使い方に、そしてさらにこ

れが家族關係の調整、家計の運営方向の改善というところまで到る。こうなると仕事がいちいち錯雜した生活の全體系 (entire system) 各構成要素の作用關係にかかわり、その眞只中で進められねばならないから、生活改良普及員は今迄のようにたんにある一、二の家事技術を習得した技能者では濟まなくなつてくる。どうしても生活の慣行そのものを構造的にとらえて、そのなかで仕事の位置を確認し、実行していく態度と技能とをもつことが要請されてくるのである。(本稿五以下参照)

永い歴史をもつアメリカの家政普及事業において、このことが広く認識されたのはごく近頃のことである。「Home demonstration agent がその仕事をすすめてゆくばあい、どうしても社會科學 (經濟學、社會學、文化人類學、心理學、教育學、政治學など) の訓練を更めてやり直さねばならなくなつてきている。」(U.S.D.A.: Home Demonstration Agent, p. 38)

もしこのような社會の網の中で個々の仕事を確認し、また確認實行できる技能をもつことができたならば、そのときわれわれは公言してはばからないであらう。洋裁の先生、保健宣傳屋、佐官屋でなくて、本來の意味の生活改良「普及員」が誕生した。そしてこのような生活改良普及員がこの國のすみずみに充滿したとき、あのあやしい「光と影」とは自らにして消失することはまちがいのないことであらう。

以上要するに、普及事業四年の足跡は漸く問題の巾と深さとを明らかにしつつあること、その問題の焦點というのは、生活慣行

の構造をありのまま、合理的なものとして捉へること、(註) としてその全き確認の上に全國民社會及び經濟との關聯を考慮に入れて、更めて一段高次の生活慣行が打ち出され、實行さるべきこと、こういう手續きに他ならぬであらう。「存在するものは合理的なり」(ヘーゲル)、「自然を征服するものは自然に従うことによつてのみ達成される」(F・ベーコン)

(註) この考え方は農業普及一般についてもあてはまる。拙稿、「農業診斷學確立のために」(新しい農業、昭二五、一〇月號)

次に問題を農民の生活慣行の構造をとらえるという面に限つて、生活改善論者の立場をその一例としてとり上げつつ若干私の考え方を紹介し度いと思う。

五

「押し入れ」問答 いまの農村改善論者には二つのタイプがあると思われる。その一つは家事技術そのものをもつ社會性、従つてそれに由來するところの家事技術(廣義の)が農民の間に普及するときに受ける、家、村落其他社會のワクの強力な抵抗、あるいは經濟的諸條件から來る阻害現象などに對しては甚だ無關心であつて、専らその努力を細目精緻な家事技術に集中し、カマドの熱効率、野良稻のいたみ方、どこに「肩あて」をおくといひとか悪いとか……に専心する、あるいはせいぜいのところいわゆる輸

入ものの普及技術(Extension technique)を教へ學ぼうとする、
——傳統的な女子大の家事、家政教育の方向、これは中世的「女
大學」の量的延長にしかすぎぬであらう。

他の一つのタイプはこの方向に叛旗をひるがえした人達で、逆
に、農民殊に農家の主婦のおかれてゐる社會的經濟的ワクを強調
し、いくら前者のように技術的細目をとぎすまし、農民の間に押
し込もうとしても、農家にはそんなものを入れる「押し入れ」が
ないのだからダメだ。先ずなすべきことはその條件を變革しワク
を擴大することである、「押し入れ」を作つてやることである、
と主張して、眞向から前者と對立してしまふ。例えばこういう發
言はそのタイプカルなものだ。

「農家の主婦の勞働時間調査をみても、ほんとうに牛馬みたい
なもので可哀そうですね。氣の毒だとは思いませんか。それもこ
れもつまりは農家が貧しいからで、これはそもそも根本的には日
本農業全體の問題であり、つまりは日本資本主義の矛盾の表現で
す」。次々にこつこつて行くメドがきまつてゐる。この立場から
云えば現在の如き、あるいは一般的にも、家政家事普及事業は恐
ろしいナンセンスであり、資本主義の揚棄こそ唯一の目標であ
る。つまりそうすれば生活問題の如きは論理の必然として實現す
るといふ、結局生活改善事業放棄論になる。*

* 大正中期以來婦人問題がやかましくなつてから支配的論議で
あつたところの、婦人の生理的自然的特性そのものに、婦人の
社會的地位の低さを解消してしまふという方向に對抗して、

婦人の「かかる自然的特性は社會的諸制約が盛られる器にすぎ
ぬ」(山川菊栄、『婦人問題』)とする論議が起つた。ここに出
てゐる二つのタイプもほぼ上達の二つのタイプに對應するもの
である。

こういう二つのタイプは何も生活改善事業の場面のみでなく、
他の農業技術普及の場面でもほぼ同じ二つの方向が對立してゐ
るのであるが、ここで注意し度いことは、この兩者とも互に他を對
立的孤立的にとらえ、相互連關的にとらえていないという點であ
る。つまり生活の一面面を専らとらえ、それを構造的に把握して
いないといううらみがあるという點である。

技術は科學技術である限り、既存の社會のワクを越えると同時
に、そこに根付いたとき、逆に自らのワクを擴大する「社會力」
をもつてゐる。このことは既に一部の方々には認識されてゐる立
場であらうが、(例えば、中央婦人問題會議、『家庭生活委員會總
會報告』二三頁の結論をみよ)、當面生活改善事業の實踐そのもの
のなかに、かかる認識を生かして行くことは、いまのばあいに極
めて大切な立場だと思われ。

六

モンペとワンピースと なるほど農村には改めらるべき生活慣
習や社會關係が甚だ多いと云つてもいい。しかし「あれもこれ
も」というデパートメントストア式は改善實踐をすすめてゆくこ
きにはうまいやり方ではない。多くのうちから唯一つを選んでそ

ここにキョートーホを築き、そこをくさびにして擴大進出していくようにせねばならぬ。*

*九州の有名な篤農、松田喜一氏の言葉を借りると、「一角破り」という。農業經營を改善しようとするときに、家畜も入れよう、農道も改修しよう……ということではきつと失敗する。

あれこれのうちのたつた一つを選び出して、他を斷念し、一つに專念することが、成功の鍵だというのがその言う意味だ。教育方法の一つとしてプロジェクト・メソッドというのがあるが、これは「一角破り」を西歐式に表現したにすぎぬ。

ところで、そのばあいには鍵になるもの「一角」は何か。私の考えるところによれば、「農家の手から遠く離れているもので、しかも今や農家の生活に必須のもの」がこれに役立つ。例をあげて説明するのが一ばん解りよい。

洋裁と和裁の講習のばあいを比較してみる。

和裁のばあいには新嫁は「しうとめ」から仕込まれる。あるいは娘も農閑期になると村の師匠の家へ通う。つまりそれは村の傳統的リズムのなかで呼吸し、村の經驗によつて一おう事足りるものだといつてよい。従つてそのとき假りに生活改善普及員が來ても「和裁の講習をするから」と宣傳しても、「あんな若い娘つこに何がでる、それよりも本家のおときばあさまに習つた方が餘程腕がよくなるのに、縣廳もこの頃は税金を餘計とつて、馬鹿なムダ費いばかりする」とこいう風になり兼ねない。(モンペ・カマドの改良なども多少こいう類の反抗に出あうであらう。)

ところが洋裁となると事情がちがつてくる。戦後ヤミでもうけた金で財産のつもりでミシンを買つておいたが、どうもうまく使えない。といつて村には適當な先生もなし、娘にも習わせ度いし……というときに「洋裁の講習をやります」という通知を受けるとつたと假定し給え。相當頑固な姑さんも「お前いつてきなさい」ということになりやすい。長野縣の村で實さい私はこした例を発見したことがある。すなわち農家の生活に今や必要となつていて而も農家の今迄の經驗のなかにないもの、「モンペ」でなく「ワンピース」が、その生活改良事業の鍵になるということである。もちろんワンピースの例は一例にすぎないのであつて、具體的にはどの地方でこいう生活技術がこばあいの條件に最も適したものであるかは、それぞれ慎重な吟味を要するところであらう。

七

ホーム・デモンストレーション・ウオークの發端 以上の如き認識は既に他の普及活動部門において確認されていることであるし、むしろ普及事業の本質そのものの由來していること云つてよい(拙稿「農業普及の基礎概念」農業総合研究四の四)。しかしこの際このような觀點から、アメリカの Home Demonstration Work の發端を考察してみるのは甚だ興味深いと思ふ。

一九一〇年普及事業創始者として有名ななかの Dr. C. A. Knapp によつて始められた家庭實地教示事業が、まず手始めにとりあげ

た生活技術が罐詰の作り方だった。農村學校の一女教師 Marie Croner がポータブルの罐詰器具をもち歩いて、トマトのキャンニングの指導をして歩き、各地に Girls Canning Club を作って大成功を収めたのを、ナッパ博士の慧眼がこれを見つけたのが、その發端をなしたといわれている。(U.S.D.A.: Home Demonstration Agent, p. 32)

ここでは罐詰作業はちやうど上例の洋裁のように、當時のアメリカ農家には見慣れぬ技術であると同時に、食物保存 (food conservation) のために必須のものとなりつつあったという事情が注意されるべきである。*

* いまは全國民人口の約二割にしかあたらず農家の主婦たちの手で、全國民食糧の約四割を占める罐詰を作り出しているという(一九四四年)。なお、罐詰保存は最近家庭用冷凍裝置の普及に伴つて次第にすたれ、主として冷凍 (freezing) がこれに代つてきているという。

そして罐詰作りによつて「一角破り」が成功したとき、次々に――まず罐詰の保存食品を用いてする料理の講習、栄養講習會から始まり、育児、家政……と廣い分野が拓けてくる。一は他を喚び風は嵐を誘う。

「縫紉機と現代の綿織機械との發明とを結ぶこの時期に農家にとつても腕の熟練と並んで科學が必要だという認識を農家をもつようになつた。一般の農民とその主婦たちの實踐のなかに、どのようにに速やかにこの望ましき變化かとり入れられ得たかは全くこ

の科學の巨大な影響力にもとづくものである。」(Kelsey & Harne: Cooperative Extension Work, p. 10)

八

「押し入れ」を據げる力 なお此のさいに注目すべき事情がある。それは、かくの如き科學的 (ゾムバルトの意味で) 生活技術こそが、そしてこれのみが農家の主婦の上にも重くおおいかがぶつていゝところの家父長制的「家」などの社會的ワタを自らはね除ける力をもつていゝことである。

ミシンを踏んで忽ちにして孫のベビー服を仕上げてしまう嫁に向つては姑は一指も加えることなく感嘆するかもしれない。ここに姑の傳統的支配力の一角が崩れ去るキッカケが技術的に與えられる。若し和裁のばあいならば、なお姑の傳來の技術が若い嫁のそれに比して壓倒的力を持ちより有効であるために、逆にこれを一つの機縁として「わしは自分の嫁に教えた」ということで、さなきだに強い傳統的支配を強化する方向に働らくであらう。*

* F・オツペンハイマーは支配―服従關係の一つの基礎として、技能の高低をあげた。(Art Herrschaft im Handwörterbuch der Soziologie)

なお、生活の場面ではないがかかる觀點からしてきわめて示唆深いエピソードがある。それは次のようなトラクター村興除村の農學校卒業生の思ひ出話のなかにある。

「モーターを買いに行こうというときに、おやじから始めてお

前も一しよに行つてくれ、と言われた。學校で習つたことが始めて役に立つた！ そのときのうれしさと誇りとは永く忘れることはできない。」（山田清人著、『全村學校』二六九頁）モーターが年若い息子を伸ばして行く。又私が東北地方の農家を調べたときにも、昭和初頭に化學肥料が普及して行くと、その使い方が普風の「おやじ」にはわからない。そこでこれが經營の實權が早く若い息子に譲られていく一つの大きなキッカケになつたことを知つたことがある。（全國的に、同様のデータは中村研究員の石川縣における生前相續に關する調査にもあらわれている。）

われわれは以上にスケッチしたように、生活を技術、社會更らに經濟との相互連關において、もつと學問的に表現すれば、八自然技術社會の全構造のなかでとらえることによつて、生活改善普及事業の一段の飛躍が期待されるように思う。そしてこのことは他の側面から云えば、「生活とは何か」という問を更めてここに考え直すということにもなるであらう。

いまや村々にひろがつている生活改良普及員の日々の熱情的な活動のなかに、このような理性的反省の一線が貫かれることを、われわれは期して待つべきであらう。そしてここでさらに注意したいことは、このような方向がとられることによつて——一見直接的には「good」な効果はあらわれ難いとしても——このうえに盛り上つてくる普及活動の打ち消し難き力と農民たち自身の生活側面に對する自覺とが、やがてはあの「光と影」のあやしき交錯を解消するようになるにちがいない、こういう點である。

附記 今日農業團體の再編成問題にからまつて普及事業そのものの根本的規定に向つて多くの批判或いは非難がなされているように思われる。しかしこれらの諸説が前代の補助金を中軸とする勸業事業の嚴しい批判を経て後にそれがなされなかつたならば、これはナンセンス以上の何ものかを背後にもつていと言われても仕方がないであらう。われ／＼は少くとも實さいに——決して輸入品としてでなく——進められている今日の普及事業の到達點と問題とをまず確認し、これを前代の勸業事業との對比において考え合わせるものが最低限の義務であらうと思う。この後にこそ批判があり得るのだ。こういう觀點からしても本書を親切に吟味することは——他に農業技術普及についてこの種のものが未だ広く刊行されていないだけに——意味がある。

最後にこの問題に關して私見を附け加えるならば、本文に記述した如き問題の疑念が實さいの普及活動の四年間の苦難の成果としてここに生れていること、このことは前代の勸業制度の下では少くともこれ程廣く深くは期待できなかった事柄であらうということ、従つてこの方向がさらに伸ばされて行くならば、例えば生産のための生活を合理化するための資金の要求というものも自らにして下からもり上つてきてこれを引っぱり出す、そしてこのばあいには自主的にこの資金を有効に活用するにちがいない、こゝうゆう豫想が可能である。その準備のために本文にのべた如き認識が不可欠であらう。